

2024 年度 大学院 1 期 入学者選抜

文教大学大学院 教育学研究科

学校教育専攻（修士課程）

「小論文」問題

受験番号	氏 名

文教大学大学院

下記の問題について、1000 字以内で論じなさい。

ただし、文章は横書きとし、段落は適宜設け、常体で書きなさい。

【問題】

以下に示すのは グローバル教育学者の亀住忠久の文章である。筆者の主張をあなたの言葉で簡潔にまとめた上で、筆者の主張に対するあなたの考えを述べなさい。

「人はなぜ教育を必要とするのか」「人はなぜ学ぶのか」この問いは、その人、その人の持つ教育目的観や使命観を明らかにすることを求める。そして、この問いに応えようとするとき、私の脳裡に浮かぶのは、オランダ生まれの教育学者マルティヌス・ランゲフェルドの次の言葉である。

「どんな人の生涯にも二つの自明なことがある。誰も自分から望んで生まれてきたわけではないということ。(しかし) 人はみな自分の人生を自分自身の上に引き受けることを学ばねばならないということ」(ランゲフェルド、岡田渥美ほか訳『続・教育と人間の省察』 玉川大学出版部、1976 年)

私の教育目的観・使命観の根底にあるのは、上述の彼の言葉である。すなわち、教育の究極の目的や使命が、自分の意志で誕生したわけでない子どもに「自分の人生を自分自身の上に引き受けること」の意味と意義を自覚させ、覚悟させることにあるという彼の言葉に依拠して自らの教育観を形成し、教育活動を展開してきたように思う。

今日、「学力低下」や「いじめ」などの問題に触発されてか、「教育改革」や「再生」論が盛んである。しかし、いずれの議論もいささか皮相に過ぎるように思われる。我々は、今一度、ランゲフェルドの言葉に立ち返って「なぜ子どもを教育するのか」、「学ぶとはどういうことか」、その意味・意義を教育の根源にまで戻って熟慮する時期にあるのではなかろうか。

(亀住忠久(2012)：『「グローバルリスク社会」と教育』、中部日本教育文化会より抜粋)